

北畠八穂

透きとおつた人々

東京新聞出版局

北畠八穂

透きとおった人々

©1980

昭和五十五年四月十八日 初版印刷
昭和五十五年四月二十五日 初版発行

発行者 真 野 義 人

発行所 東京新聞出版局

東京都港区港南二―三―二三

中日新聞東京本社

振替口座(東京) 五―五四九七

電話 ○三―四七一―二二一(代表)

○三―四七二―四四三四(直通)

印刷 猪瀬印刷株式会社
製本 株式会社鈴木製本所

透きとおった人々

目次

大佛次郎さん	中島 敦さん	武田麟太郎さん	神西 清さん	島木健作さん	林芙美子さん	立原道造さん	堀 辰雄さん	坂口安吾さん	太宰 治さん	中原中也さん
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
89	79	71	65	57	47	43	33	27	15	7

川端康成さん……………99

室生犀星さん……………117

中山義秀さん……………127

秋田雨雀さん……………135

平林たい子さん……………143

吉屋信子さん……………151

森田たまさん……………159

由起しげ子さん……………171

棟方志功さん……………179

あとがき……………187

貼り箱和紙絵・遠藤加津子

(日府展理事)

扉カット・原 美代子

透きとおった人々

あなた方は透きとおってしまわれました。

透きとおったままに、あなた方は、なおありありと見えてきたところがあります。ねんごろに生きて在られた証でしょう。しばしば思いもかけない場所から、あなた方の射た矢を見つめます。鏃^{やぶ}の向き、突きさした弓勢^{ゆんぜい}、矢羽の朽ちぶりに、それぞれ、時をしのびます。

中原中也さん



ナミちゃんたらギッチョンチョンでパイのパイのパイか、と、中原さんにからかわれたナミという家事見習が、

「中原様って、クラゲに似ていますね。」

向き合っているところがないけど、あんなに皆様が珍重なさるからには、歯ざわりもよろしいんでしょう。刺されれば、腫れる毒もありじゃないですかと、こじつけたのに笑わされながら、
(中原さんて、この人達の感も引き出す)

と、おそれました。クラゲと聞けば、なるほどの中原さんでした。きまった輪郭はあるのですが、そのふちどりと外界とのケジメがオボロにボヤケて、中原さんの中身と外界とが融通している

らしいのです。会うたびに中原さんは、ウゴウゴ変わってくるみたいでした。なにせ軟体動物に似ていました。

会ったことがないときから、中原がケンカしたとか、つかかかったとか聞いていたのに、会うと、当たりはやわからかに、素直に見えました。

貝の身が、貝ガラなしに歩いているいたいたしきで、貝ガラを探して被せたくまりました。が、被せたら、脱ぐか破るか、溶かしてしまいそうでもありました。中原さんの軟体からは、それだけの破壊液がにじみそうでした。それがナミのいう、クラゲの刺す毒なのでしょう。

中原さんは、奥さんが目を悪くした時、手をひいて毎日、医者へ通ったそうです。ドブ板につまづかせまいと、連れてゆく中原なんだと、見た人から聞きました。お子さんを亡くした時は、魂をそのお子に連れ立たせた中原さんだったそうです。

中原さんから去って行った先の奥さんが、なおざりな人の子を生み、子の父親が寄りつかなかった時も、中原さんは、先の奥さんに出来る限りを尽くし、生まれた子の名も、

「いい名をつけて上げたいとねがっていたら、仏様が見えてきたから」

と選んで、つけて上げたそうです。

（まれない人）

と、聞く耳には涼しさがおるのに、さて中原さんを目の前にすると、えぐみが先にきて、舌の苔を歯でこそげたくまりました。このえぐみが、軟体中原さんのきよめの毒だったのではないでしょうか。

冬の終わるか、早春でしたか、うちの離れの縁の日だまりで、中原さんは半ば腰掛け、私は家事見習に呼ばれながらの対話が、ひょいとしたはずみからキリストの話になったのです。しかも、まるき

り行き違いました。

私は明治のキリスト教徒の家に生まれました。聖書は旧約、新約とも、オトギ話の興味で読みました、ヨブ記さえも。十五で洗礼を勧められると、断りました。牧師さんに取り次いでもらわなくとも、エス様と私はツーツーだ、という反抗期だったのでしょう。教会からは離れましたが、エス様には知らず識らずにすがり、申しわけない仕儀になつては、舌の先を出して、きまり悪がる相手がエス様でした。

中原さんの言い出したキリストと、私のキリストとは、だから別人の如く違いました。私は中原さんの言うことに、いちいち、

「違います」

と答えました。中原さんは何故違うか、違うところをつきとめたげに、食い下がりました。が、私はその時、家事見習の呼び声に応じねば、まずいおかずを家中に食べさせねばなくなるか、羽織

の袖があべこべにつくかの、主婦業に差し迫られたさなかでしたので、

「またね、この次。」

せかせか片膝浮かしかけて、エス様話になりましたでしょうか、だったのでしょ。

中原さんが、そのつぎ、キリスト話のつづきをしに来られたのは、それから間もない日でした。あいにく私は、カリエスのひどい痛みで、前夜からきつい麻酔で眠らされていました。

昼日中でしたが、病室と向こう二間は、雨戸を閉めきっていました。家事見習は、閉めた雨戸の端からのぞいて中原さんに応対しました。中原さんは、こうこう取り次げば、お宅の奥さんはきつと起きて会う、と粘ったのですが、彼女は起こせない、とガンと断りました。中原さんは押して繰り返しましたが、彼女は、拒み通しました。中原さんは残念そうに、庭の芝生を下駄でこすって帰られま

した。お気の毒でしたが、と家事見習は幾分手柄顔でした。麻醉がまだ残る私は、

「そう。また、いらっしゃるわ」

といったのですが、この帰り道、中原さんは駅の広場のあたりで気分が悪くなり、その後寝込まれて、亡くなりました。

（しまった）

取り返しのつかない大しくじりに、私はエス様へ、きまりが悪い舌の先を出し、

（エス様、中原さんはエス様を呼んでいました。希くば正身でじかに、お答え下さいまし）

この外ありませんでした。